

「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ

秋 山 幹 男

Similarity Perceived between Daughters and their Parents

— Its Status Quo and Perspective —

Mikio Akiyama

I 「親子の似より」研究の現状

—心理学徒の心理学史(30年史)

1960年代の始め、心理学は心(こころ)に触れることよりも、行動の科学としての追究にその学問存在の根拠を置いていた。そのため、心(こころ)のことを直接口にするのは難かしい時代であったと言えよう。捉えどころのない、実体もはっきりしない“こころ”というものを対象にするのではなく、 $S \rightarrow R$ (刺激と反応)の関連性をみることに、少し発展して $S-O \rightarrow R$ (「O」=有機体)の中で、人間をも包含した生き物の環境適応のあり方、つまり、行動の法則を探り出そうと心理学はその持てる力の大部分を傾けていたように思うのである。

この時代の流れに棹をさし、「人間存在」とか「かかわり」とかいった次元で心(こころ)を口にするには随分と勇気がいったことであろう。今になって考えてみても、やはり心理学の「心」の字は、“こころ”と読むべきものであり、行動の「行」のそれを当てた心理学的アプローチは、一般の人々にとってかなり不可解なものではなかったろうか。心理学概論の講義をするとき、今でも学生達の戸惑いは大きく、ズレの大きさに驚きながら、期待を裏切られたという声を耳にする。

20歳の頃、ネズミを被験体にして実験研究をしていたが、それはネズミ学を確立するためではなかった。ネズミ達もみせる不安・恐れといった情動の変化を見極めながら、行動療法の基礎研究をするために回避学習の消去プロセスを追究していたのである。ネズミ達とも随分仲良しになれたが、私の狙いは、人の傷ついたマイナスの心をどのようにプラス変換させられるかであり、この一連の実験はそのメカニズムの基本のようなものを発見したいといった気の長い目標への一里塚であった。しかし、ネズミの心の変化を行動から読み取り、それを人間の心にも応用していくにははっきりとした限界が存在していた(特に認知レベルで)。心理学とは関係のない分野の学者や教育者から言われ続けたのは、「学習心理学はよくネズミを使うけれど、ネズミの学習プロセスを追究することがなぜ人間の学習プロセスの構築に寄与しうるのか」ということであった。同じ頃、知らず知らずの導きのお陰だったのだが、大学院時代臨床心理学演習の折に話された、V. E. Frankl のロゴセラピーに妙に引きつけられていた(1968, 1969, 1971, 1973, 1974a の論文)。

以来30年の歳月が流れ、心理学徒として私なりに心理学の発展を目にし、共に歩んできた。

その間、心理学は行動科学的アプローチだけでなく、認知心理学という分野を拡大させ（情報処理分野の進歩があったからではあるが）、これまではブラックボックスとして据え置かれていた「O」（有機体）に科学的なメスを入れるまでになってきた。また、一人の人間の心の変化を大事にし、自己受容への道に向かう手助けをする臨床心理学の諸実践が、心理学における大黒柱の一本になるところまで学問的な成長を遂げてきた。

1960年代も終わり頃、自然科学的な手法で心理学を行おうとする流れに疑問を提起し、「人間存在とは何であるのか」ということにもう一度謙虚に迫ろうとする人達が日本の心理学者にも現われてきた（谷口・早坂・佐藤 1967）。心を失った行動科学的なアプローチにあきたらなくなったこれら先人達は、自然科学の心理学を「他人の心理学」に行きついたらとみなし、「人間の科学」的心理学は、「私の心理学」であるべきだと主張した。また、それまでに行動科学としての心理学が積み上げてきた成果は、別の角度（視点）からでも了解可能なことも論じてみせた。当時、谷口は50歳、早坂44歳、新進気鋭の佐藤は30歳であった。その論述は、確かに人間存在を対象にするこの心理学が人間の「心」に目を向けたものであることを示していた。当時でもすでに臨床の分野においては、Freud, S. (1856-1939) の精神分析から派生してきた多くの流れが存在していたし、Rogers, C. R. (1902-) の非指示的カウンセリングも事例の積み上げと理論構築を着実に押し進めていた。さらに心理療法の分野では、人間哲学を背景にもつ فرانクルのロゴセラピーや Binswanger, L. (1881-1966) の現存在分析など、ユニークな試みも完成の域に達しつつあったのである。

患者の声に謙虚に耳を傾ける現象学的なこれらのアプローチ（事例研究）は、普通の生活ができる人々を対象に行動の法則を発見しようとする一般心理学的アプローチ（平均的データ研究）と肩を並べる（いやそれ以上の）存在にまで急成長していたのであった。「自分とは一体何者なのか」「人と人との関係」に偏見のない関心をよせることにより、“私のこころ” というものに改めて目を向けることができるようになりかかっていたと言い換えてもよい。Maslow, A. H. (1908-1970) の「自己実現」、ロジャースや Jersild, A. T. の「自己受容」という概念が注目されるようになり、そこから数多くの主張がなされ始めた。この新しい潮流は、日本における心理学研究にも大きな衝撃を与え続け、地熱と化し、われわれ一学徒の固くなりかけていた頭を揉みほぐすのには十分役立っていったのである。

「親子の似より」研究が手にした成果

1974-1985までを中心に

この23年間女子学生（青年女子）を対象にしてかかわり続けてきた一連の研究は、「親子の似より」という自分を取り出した概念から眺め直してみると、これからどのように研究を方向づけていくかの見通しまで得させたように思う。この51歳の気付きを中心に論述を試みてみようと考えたのが本論文である。

8年のネズミの研究の後、0から出発し20年の歳月をかけたこの調査法が手中に納めたキーワードは、何と「親子の似より」というたった一つ。この用語を発掘するのに苦心した方法論的模索については既に詳しく述べてきた（1980, 1988, 1992論文）。本論文では視点を変えて、まず研究の流れを研究成果の面からまとめ直し、これをもとにしながら今後の研究のパースペクティブにまで持っていきたい。たった一つ概念を手にしたただけなのに、自己形成と親子関係にかかわる諸事象について種々の発想が沸き上がってくるようになった。これは新鮮な驚きである。大袈裟に言えば、コペルニクス的転換が起こったか

のようなのである。

1974b 論文がこの新しい研究のデビューである。この折にはまず3つのことが検証されている。

- 1) 女子学生がイメージしている父親像と母親像はかなり好意的なものである。
- 2) MPI の結果をもとにして構成された E-non N 型の学生 (外向的で非神経症的と自分を認知している) と I-N 型の学生 (内向的で神経症的傾向が強いと自分を捉えている) について比較してみた。前者の学生達は自分と両親を同じような性格をもっていると認知していたが、後者の者たちは、三者の間で共通する性格特性項目は少なく、むしろ親と自分を対峙させるような形で認知していたのである。I-N 型の彼女たちは自分をとてもマイナス的に受け止めている。
- 3) 「青年らしさ」の評定をも求めたところ、女子学生達は現実の自分から大きく掛け離れた理想を思い描くのではなく、より現実の自分に近いところで「らしさ」を設定している。E-non N 型の学生はその人らしく、I-N 型の者はそれよりも低くずらしたところで認知していたのである。

中山 (1972) は、親に対する見方の変化を発達的に調べている。大学生ともなると、「欠点はあるが尊敬」という受け止め方が急増する。この研究には1977年頃出会っているが、自分のものと合わせ考えた時、大変面白いと感じたものだ。

丁度この頃精読していたのが谷口らの本だったのだが (当時30歳)、最近になって50歳の目でもう一度読み直してみた。何と知らず知らずのうちに、今の研究にかかわる大切な文章に遭遇していたことに改めて気付いた。それは早坂 (1967) の記述の中に埋もれていた。

パーソナリティ・テストにおける事実

- ① 自己診断と他者による診断との間に大きな違いがみられる。
- ② 自分の自分に対する診断と他人に対する自分の診断との間に、意外に似た判断傾向がしばしば見受けられる。

人びとの対人認知はしばしば高度に自分本位である。自分のほんとうの客観的な把握は自他の関係を通してなされるほかはない (p. 197 より)。……人間関係が個々の人間をつくるのである (p. 206 より)。

この箇所がそれである。もう少し今回目に止まったところにも触れておこう。自己とはかわりあいであるという事実に注目している早坂は、「人間は人間に (自分であれ他人であれ) 問いかけることによって、無限に自分自身を越えてゆくのである」と述べている。いいことばではないか。

1988論文で正式な産声をあげた「親子の似より」は、7区分表示法を用い、その区分3 (三者共通区分) に入った項目数の多少で3群に仕分けしたものである。この似より「大」・「中」・「小」群をもとにして、理想自己と現実自己のズレでみる「自己受容」の違いを 1992b 論文では詳しく分析してみた (ズレを調べるための尺度は長島ら1967を使用)。

理想自己を現実自己よりも大きくずらしている者 (「大」群の10%、「小」群の38%) は、今の自分をより大幅に変えたいと思っていたが、それほどのズレをみせなかった多くの学生達は、そのずらせ方に2群とも大差なく、ほぼ同じ程度であった。換言すれば、現実の自己把握に近

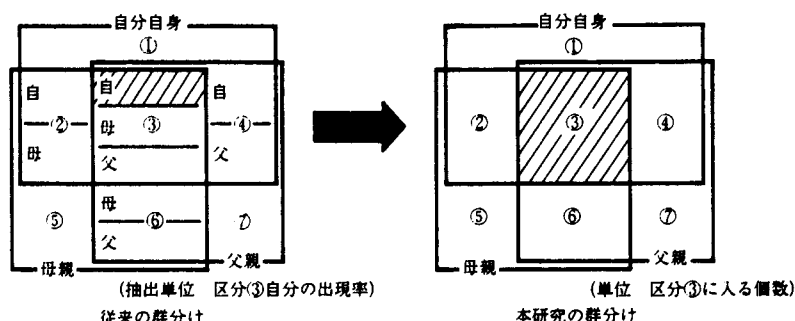


図1 7区分表示法による親子の「似より」の群分け抽出方法の変更 (1992a)

F1 内向性 (12項目)

しよげやすい
おく病な
感傷的 (オセンチ) な
意志の弱い
甘え (た)
ロマンチックな
行動力のある (-)
他人を気にする
指導力のある (-)
スケールの大きな (-)
内気な (はにかみやの)
服従的な

F2 自己顕示性 (9項目)

利己的・自己中心的な
支配欲の強い
強がり (の態度をとる)
うぬぼれの強い
ひねくれた
わがままな
頑固な
虚栄心の強い
粗暴な

F3 誠実性 (14項目)

礼儀正しい
ねばり強い
几帳面な
ひたむきな
ものを深く考える
包容力のある
正義感の強い
献身的な
親切的な
やさしい
なげやりなところのある (-)
無責任な (-)
あきっぱい (-)
調和のとれた

F4 明朗性 (7項目)

明るい
ユーモアのある
友人の多い (社交的な)
さっぱりした
冒険好きな
未来に大きな希望をもつ
孤独な (-)

その他 (14項目)

(重複負荷)
しっと深い
不安定な
神経質な (線の細い)
疑い深い (不信の)
理想主義的な
ヒステリックな
趣味の広い
(毎日の生活に) 生き甲斐を感じる
素直な
ニヒルな (未来に希望や理想のない)
体の強い (たくましい)
独立心の強い
宗教的な (敬けんな)
古いものの考え方をする

いところでそれぞれの群らしくずらせながら、理想とする自己のイメージ像を思い描いていたのである。つまり、「小」群のものは「大」群よりも少し低めのところで、その「小」群らしい理想自己をにかけていた。1974b 論文と 1992b 論文の一致が示しているこの事実は、親子の

似よりでみている2群とMPIの結果で仕分けした2群とが密接な関係にあるということである。実際に高い相関関係にあることは、1992a論文においておさえておいた。

親子の似よりを抽出するために使用している56コの性格特性項目は、4つの人格認知因子(42項目で構成)と14コのその他の項目から成り立っている。これは、1985論文でまとめた大型コンピュータによる因子分析の結果である(279名の学生が「自分自身」・「母親」・「父親」という3つの評定対象について評定したデータを使用)。この折、共同研究者の協力でクラスター分析も実施している。統計的手法によるこのクラスター分析は、当時7区分表示法をもとに認知タイプで研究していたやり方とはまったく異なる処理をしていた。しかし、その時はそれ以上の深入りはせず、このクラスター分析が、全対象を少数個のクラスターに分割する手法であり、それは「似ているもの」を集めて処理されるということにだけ目を止めておいた。丁度その頃、青年らしさと自分自身の性格特性の関連をみるために工夫した私なりの方法に、「認知クラスター分析」という名称をつけて学会において発表していたのである(1984a)。この二つの偶然の出会いがキーワード「親子の似より」という概念を誕生させる切っ掛けとなったのである。

1980-1984年にかけては、認知タイプに分けて研究していたのであるが、このやり方は調査したデータの半分しか使えなかった。そこで「親子の似より」という概念を手にした折に大幅な変更を決心し、1985年以後はこの似よりで仕分けする「大」・「中」・「小」群を区分③の出現数の多少で操作的に捉えてみることにしたのである(図1参照)。各項目について5段階で評定してもらうのだが、群の抽出にはこれを「はい」・「?」・「いいえ」の3段階に簡素化し、その「はい」と「いいえ」の判断がなされた項目を7区分の中に入れていく。その後、区分③(三者共通区分)に入った項目数の多い順に並べかえ、多い方から「大」群(大体25%位)、「中」群(50%位)、少ない方に入る者を「小」群(大体25%)としている。1980-1985年にかけては、この群の抽出の仕方とか項目をどのように用いて研究していくかに力が注がれ、自己と父母の性格認知の関連とか群の特徴をどのように取り出すかといった大雑把な追究に終始したように思う。1986年以後になると、もっと踏み込んで、3群(「大」・「中」・「小」)ないしは2群(「大」と「小」)の学生が自己や両親をどのように受け止めている(認知している)かという本題に踏み込めるところまで到達してきた。とはいえ、この研究のユニークさを主張するにはまだその入口にさしかかった程度にすぎないかもしれない。

それでも大きく浮上してきたものがある。それは、似より「大」群と「小」群の女子学生の間にみられる認知上の大差である。自己と両親に対する受け止め方が明らかに違うのである。「大」群の学生達は「小」群の者に比べて、自己に対しても両親に対してもはるかにプラスのイメージを持っているということなのだ。ここのところをもっと詳しく、研究から得られている成果をもとに論じていこう。

1988-1992を中心に

4つの人格認知因子(F1 内向性, F2 自己顕示性, F3 誠実性, F4 明朗性)をもとにして、3評定対象(「自分自身」・「母親」・「父親」)ごとに似より「大」群と「小」群の認知差を詳しく掘り下げていったのが1988論文だった。「大」群の学生達は、自己に対しても両親に対しても、共通して性格をプラス的に好ましく受け止めている者が多い(これはその他を含めた56項目の一つ一つにあたってみたものである)。その結果として似より度が高まっている。一方、「小」群の者たちは、両親と対峙した形でまたはいずれか片方の親と性格を一致させるといった形で、自己をマイナス的に認知している人が多く、そのために似より度を低めていることが

確かめられた。この事実は、4つの因子別得点（5段階評定の素データを5-1点に得点化し加算したものをその因子の項目数で割った5.00-1.00の値）を平均値以上と未満に分けて各被験者を大雑把にみるHL分析法によっても興味深い裏付けがえられた。4つの因子別得点をHLで仕分けると16通りの組み合わせが可能になるが、2群の間ではその出現が大きく片寄ったのである。「大」群においてはLLHH*が、「小」群においてはHHLLが3評定対象において25%以上の出現をみせたのである（ただし、評定対象「父親」のみ21.7%の出現）。

*これはF1-F2-F3-F4の順に記されている。

この1988年論文で指摘し、以来ずっと保留にしている問題が1つある。それは、「小」群を構成している学生の問題なのだが、3つの評定対象に対して「はい」とか「いいえ」と割り切って判断することができずに「どちらともいえない」という回答を多くしてしまった結果、区分③の出現数を著しく減らしている人もこの群の中に入れているという事実があることだ。このことは、「小」群の中にさらに異質な存在者を含ませているという可能性を生じさせる。しかしながら、この群は元来多数の認知タイプを内包していることでもあり、今しばらくはこのままにしておきつつ、群内の質的な差のことも忘れずに、ということで追究していくつもりである。

親子の似よりによる群分けとMPIの結果との間には高い相関関係があることについては前述したが、1992a論文においては似より3群の方からもう一度この問題を掘り下げ、検討を加えてみた。とても興味深かったのは、3群とも約半数（共に46%）の者達が、各群らしい特色をみせたということである。

- 1) 「大」群：外向的で神経症的傾向は弱い
- 2) 「中」群：2つの尺度のほぼ中間の「普通—普通」
- 3) 「小」群：内向的で神経症的傾向が強い

E尺度とN尺度を組み合わせると4つのマスができるが、その1つではほぼ半数を各々が占めているということなのである（ただし、「中」群は9マスで処理）。なお、自分をよくみせたいという傾向（L尺度）では、「大」群の方が高い平均得点になったのも面白いと思う。

Y-G性格検査で比較した場合においても、似より「大」群と「小」群の間に有意な差がみられている（1992a論文）。ここでも「大」群の明朗性と社交性がクローズアップされた。「情緒安定性」「社会適応性」「向性」といった3次元ともに差があるし、「向性」因子の中では、G尺度（一般活動性）、A尺度（支配性）、S尺度（社会的外向）が特に目立っていた。このY-Gはタイプ抽出もできる。これを類でみてみたのだが、D類（安定適応積極型かそのタイプに近いもの——タイプD、D'、AD）では「大」（54%）>「中」（26%）≥「小」（21%）となり、逆のE類（不安定不適応消極型かそのタイプに近いもの——タイプE、E'、AE）は、「小」群で20%の出現なのに対し、「大」群はわずかの4%、「中」群では11%であった。

1992b論文にまとめた理想自己と現実自己のズレをみた「自己受容」の差については、もう少し補足をしておきたい。

- 1) 「大」群の学生には自己受容者が多い（36%）
——「中」群18%、「小」群21%——
- 2) 「中」群では中程度の自己受容者が多い（63%）
——「大」群53%、「小」群45%——
- 3) 「小」群では自己受容の低い者が多い（35%）

——「大」群11%、「中」群19%——

なお、「小」群では半数に近い(43%)者が、自分についてやや過敏な感受性をみせていた(この過敏性因子への「大」群の高反応者は19%)。

「親子の似より」における成果の位置づけ

青年後期にある「大」群と「小」群の女子学生達を眺めてみると、Offer らが唱えている青年期平穩説を裏付ける要素を多分に含んでいるのが「大」群の人達であり、内部に多様性を秘めている「小」群の中には伝統的な Erikson 流の青年期の受け止め方である青年期危機説の立場を実証できる存在者が含まれているように思えるのである(Offer については、藤井 1983, 八木 1987, 高石 1988を参照した)。Erikson 流の立場から「大」群の存在を捉え直してみると、あまりにも安定しすぎた自己肯定と好ましい両親像を持ってしまった人と言えなくもない。両親のお陰で自己に満足できる自分に仕上がっているから見取ってもよい。では、「大」群の学生は自我同一性の拡散を上手に処理し、それを乗り越えてこのような自己確立を成し得たのだろうか。それとも子どもの頃から自分というものに疑いなど抱かず人生の早い時期に自己肯定していた早期完了者なのだろうか。現段階の分析からは何ともいえないが、このことを調べ確かめるためのデータ集めはすでに済ませており、大まかな見通しも手中に納めている(一部については日本性格心理学会第3回大会のラウンドテーブルで紹介した——1994)。

Erikson 理論を半構造化面接法で調べようとした Marcia の「自我同一性ステータス」の研究に沿って位置づけを試みると、「大」群の学生は現在同一性達成地位とか權威受容地位にあるということになるのだろうか。では、「小」群の人達はどうかなのだろう。彼女達はこれから自己認知をプラスの方にどのように変えるかによっては、今よりもさらにリラックスした人間(もちろん自分が理想とした自己受容の範囲内のことであろうが)に変身できるかもしれない。Marcia 流の把握をすれば、現在はモラトリアムまたは同一性拡散の状態にあるといえるかもしれない(加藤 1983, 鐘他 1984, 八木 1988より)。この仮説を裏付けるためには1989, 1990, 1992と1993の4回にわたって実施した調査を分析すればよい。今のところ粗方の見通しがついてきている。「自己形成」については、加藤(1983)の項目をもちい、①過去の危機、②現在の自己投入、③将来への自己投入の希求で捉えている。また「自己意識」は梶田(1988)の項目を因子分析し直し、F1 自己受容(8項目)、F2 自己防衛(6項目)、F3 他者受容(3項目)でみている。この2つは似より3群の違いを深めていくための大切な研究プロセスと考えている。

青年期に対する二つの見解と自分のデータを見比べていくうちに結びついていったのは、「自分とは一体何者なのか」という自己意識・自己形成の中に親子関係のテーマをどう位置づけるのかということであった。今から改めて親子関係について表層的な意見を収集し、その積み上げの中から新しい方向性を探っていくには時間がない。そこで、『自己』の中に取り込まれていく、つまり心内化されていく親子の関係の認知を今のような形に留めつつ、このまま追究していくことで今後の新しい研究の道を切り拓いていければよいと思い到了。その切っ掛けとなったのは、H. ワロンの「内なる他者」ということばに注目した西平(1986)が、「私をどう理解するか」というテーマのもとに「内なる他者」と「私」との関連を論じた論文に出会ったことにある。彼は、「私」を実体としてではなく“関係において”と同時に“プロセスとして”理解しようと試みているのである。彼のこの考え方が私の思考を大きく展開させることになった。心(こころ)をもっている「私」を、一つの可能性として把握してみようとする研究の道が開けてきたのである(1992a, b)。この発想の転換・前進がもう一度谷口・早坂・佐

藤 (1967) を読み直させる原動力にもなったようだ。

20年前すでにこの“関係において”「私」を理解しようとしていた彼らの考え方には目を通してにもかかわらず、若い未熟な琴線は震えなかった。ところが、50歳になって再読したその一字一句は私の心魂に触れ揺れ動いたのである。この精読に合わせながら、認知タイプや親子の似よりをもとにまとめてきた8つの論文ともじっくりかかわり直し、抜き出し作業を進めていった。すると意外なことなのだが何と、すでに最初の1974b論文の中で、その深い意味に気付くこともなく自分の研究の位置づけをする努力の中で、この内容に触れてはいたのである。それは古澤 (1973) の指摘の引用であった。ここに抜き出してみよう。

個人が自分から産出することのできる考えは、個人がそれまでに経験したことに限られることで、そこに自ら限界をもっているといえる。しかしながら、自分が出会った一つの葛藤状況を新しい側面から解釈していく行き方は、同時に自分の経路の範囲を越えたところにしか生まれえないといえる。全く別の経路の中に生まれ来ている他者の中から生じた捉え方に出会い、それが取り入れられた時に初めて彼は、今までの経験の枠を越えることができるわけであろう。

論文の結びのこたばにするためにこの一文を載せたのだが、当時はこのこたばを自分の生き方の指針として選んだように思う。51歳の今、この一文は「親子の似より」から抽出した3群の学生を絶えず頭の中に思い起こしつつ、研究者としての目で追っかけている。

1992a論文には、大野 (1991) の「人格研究はもう一度基本に戻るべきだ」という指摘に触れた時の新鮮な思いを記している。私なりのたった一つの概念を掘り出すのに16年もの歳月を要してしまった。しかし、25年以上前ネズミの実験をしながらこれをどのように人間に役立てるべきかと考え続けていたことが、人間のパーソナリティ研究にも十分研究理念として立派に通用することがはっきりと分かったのは、このたった一つの宝物 (私なりの) を手にしたからである (もちろん大野に導かれてではあるが)。ここで今一つ浮上してきた新しい概念の誕生についても触れておきたい。ロジャースは、臨床実践から「自己受容 (self-acceptance)」という概念を取り上げた。さらに彼らはこれを科学的に裏付けるために、理想自己と現実自己の差異 (ズレ) に着目し、その後多くの研究をしていったことが知られている。私も長島らの尺度を使って1972年頃から一連のデータ収集を続けていた。この理想自己と現実自己をみる研究が「自己受容」を調べるものであるということは随分後になって了解したのだが、これを似より3群との関連でまとめる努力をしていくなかで気付いていったのである。それは「親子のズレ」というキーワード。これは「親子の似より」と裏表の関係にあることばである。この“似よる”と“ズレる”という二つの視点はこれからの研究を進める上で案外大切なキーワードになるかもしれない。“似よる”か“ズレる”かという観点を自己形成 (自己意識の発達) の分野に導入すれば面白いことになりそう (もちろん直観的把握の段階)。

この思いに辿り着けたのは、1993年にまとめた教育相談についての想いによっている。自由な雰囲気の中で対談した話の内容を書き起こしてもらい、これに加筆修正をしてできあがった論文である。「今、ここで」の大切さという副題をつけたこの想い語りは、私の内に潜んでいた5つの未知の可能性にも触れるものであったし、これからの研究を切り開いていくためのパースペクティブにもつながっていたのである。

5つの発想の流れについて

1. 「自己受容」の定義は、評価なしに“ありのままの自己”を受け入れるということであるが、これを日本独特の心理療法である内観療法の存在意義と結びつけて考察してみよう。「して貰ったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」の三つで身近な人々との関係をじっくり見つめ直す自己凝視のこの治療法の重要性はどこにあるのだろうか。悩んでいる「私」が内なる他者とがっぷり4つに組めるチャンス(場)を与えることにあると読み取る。「ありのままの自己」を受け入れるということは、その人のかかわりの中にこそ本当の自己の存在があるのだということを、心の深いところで感じとらせ、これを感謝の心(報恩)へともっていくことにあるといえよう。M. Buberの哲学用語で言うと、身近な大切な人々との関係を「Ich und Es」の受け止め方から、「Ich und Du」に変えていくことなのである。それは何ともの難しいこと。だからこそ、今日のこの一日は自分にとっても他者にとっても大切な出来事の日。このような心の発想転換が生起すれば、一人でここまで生きてきたのではなく生かされてきたのであり、その汎化現象として、「生かされているのだ」意識が発生してくるに違いないのである。この延長線上に神や仏が誕生し、報恩の心が沸き上がってきたとしてもそれはそれでよいのではあるまいか。

2. 私なりの20年間の思考の文脈を他者のことばで表現してみたらどうなるのだろうか。

- 1) 親子関係の病理を家庭に醸し出される雰囲気の影響として捉えようとした 田畑 (1977)
- 2) 精神病を脳疾患や自我の障害と考えず、人と人との間の現象として理解しようとした
木村 (1972)
- 3) その人のまわりにたちこめた雰囲気とまなざしについて詳述した 霜山 (1978)
- 4) 関係的存在としての子ども(子どもの生活世界)を現象学的に捉えようとしている
鯨岡 (1986a)

- 5) 新しい動きとして鯨岡が紹介している欧米でも始まっている「間主観性 inter-subjectivity」概念とその研究 (1986b)

これら一連のことを相互に関連づけながらみていくと、木村(1972)が東洋思想に古来より脈々と流れ続けている「気」の領域の現象として捉えようと考えているものと、人間学的に人を理解しようとするこれらの心理学的アプローチが密接な関係にあり、お互いは強いパイプでつながっているということになるのかもしれない。

3. 女子学生達が捉えている「自己」と、心内化された「父母像」を素直に読み取るということのような研究を続けていけば、現在問題になっている家庭の病理を解く鍵が手に入るかもしれない。このやり方は van den Berg 流の現象学的方法(「見る」という学問的手法)をもとにしているのだが、「認知のズレ」とか「情緒のもつれ」とかいった案外(意外と)簡単な事柄のなかにこそ、人間存在・人間関係の真実が潜んでいる気がしてならないと40歳始めに述べている(1985論文に加筆)。10年後に読み直してみたが、「そうだ」という思いは強まりこそすれ薄れることはないようだ。1993論文において、青年期の子どもをもつ母親の心境を表わすことばとして「心の中のスカート」という用語を創案してみた。一方の父親のテーマとしては、1980年に「実存的な対決の場を青年は求めている」と指摘した河合が、1992年には「親の壁」ということばを使っている。青年が現実に対処していく時の自己規準をつくり上げるために大切なこの社会の壁を、父親の心境を表わす用語として用いてみたいものだ。

日本家族心理学会が研究会からスタートして学会となり、そして11年が経過した。家族システム論をベースにした家族療法が脚光を浴びるようになり、一人のクライアントを対象にする治療から家族を巻き込んだ家族カウンセリングにまで裾野はひろがった(岡堂 1983,

1986, 1991, 亀口 1992)。この学会の動向をみながら青年期の対人関係を家族関係の面からまとめ上げてみたのが1991年であった。これは青年心理学のテキスト用に書いたのだが、青年の自己開示と家庭の雰囲気の関係について論じており、この流れの中に「親子の似より」研究も位置づけていきたい。あとは情動（恐れ・不安と喜び・希望）をこれに組み入れ、それを行動レベルにまで押し上げて詰めていけばよいのである。

4. 1988論文の考察では二つの記述をした。①「他人と自己とは別々の存在ではない。自分の心の中に映し出された他者があってこそ、本当の自己に出会えるのである。そういう他者を受け入れようとする気持ができあがってこそ、自己が他者がイキイキと知覚され一体化への関係へと結びついていくのであろう。」

②「“自己を知る”ということは、自己の中に他者を見い出すことである。自分を今日たらしめているのは、両親はじめいろいろな人々との出会いのお陰であるということに気づき、出会いなくして今日の自己はありえないという感謝の気持が素直に出てくるところにある。」

これは、横山（1987）の十牛図の世界第六図騎牛帰家の章に書かれていた自分と他人の関係の捉え方に接してできたものである（45歳時）。この心境の変化がロジャースのカウンセリング理論への歩みをさせたといえる。中村・板津（1988）は「カウンセラーが他者受容するためには、まず自己受容していることが前提である」とし、「自己受容というパーソナリティの変化は、パーソナリティ成長の始まりである」と捉えている。この記述に目が止まるようになったからこそ、「親子の似より」研究は自己受容へと結実化していった（1992b 論文—49歳）のだし、次のような図式を描けるところまで来ているのである。

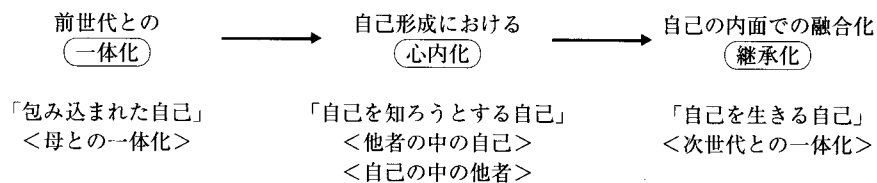


図2 「……の自己」の流れ

5. 西平（1986）のいう「私」と「内なる他者」との絶え間のないズレ（関係でありプロセスであるという認知の中での）は、自己形成期にある人間にとっては確かに重大な発達課題であるといえる。しかし、一つの完成期に近づいてしまった成人期や老人期での課題でもあり続けられるのだろうか。今のところ、これは疑問のまま留めざるをえない。あわせて、「お互い適度な距離を維持しつつ、自己を卑下するのではなく、この世に生を受けたたった一人の尊い生命であることを忘れず、誠実に明るく、日々の生活を大切にし、生かされていることに感謝しながら、今日一日を精一杯大事に生きていく仲間（同伴者）でありたいもの」という45歳の想い（1988論文のまとめ）は、今から10年後の60歳を過ぎた頃にも自分の生き方・考え方として健在でありうるだろうか。

ここでは5つの発想の流れという形でまとめてみたが、この考えは、日本性格心理学会第3回大会でのラウンドテーブルに向けて資料の準備を進めていくうちに芽生え、学会当日（1994. 7. 22）の3人の課題提供者と参加者との話し合いの中でその姿をみせるようになったものである。

Ⅱ 「親子の似より」研究のパースペクティブ

事のはじめに

現在までに調査を済ませ、整理も大体仕上がって、一応の結果が見通せるところまできたデータが手元にある。まだ論文化までには到っていないのだが、ここで紹介しておこう (表1)。

表1 整理がほぼ完了しているデータ

調査実施年	調査の内容
1. 1982-1985	女子学生の捉えた親子の似よりの4年間の推移 — 4年間連続の協力者34名—
2. 1980・1984	学生とその母親と父親に実施した親子の似よりの相互関連性 — 83組—
3. 1986	幼児をもつ若い母親の実父母との似よりとわが子の性格認知・ 養育態度 — 292名—
4. 1989・1990	女子学生をもつ母親の実父母との似よりと「娘・夫」の認知 — 114名—
5. 1989・1990 1992・1993	女子学生における親子の似よりと自己形成・自己意識 — 300名位—
6. 1992・1993	女子学生の親子の似よりと家族イメージ・エゴグラム — 160名位—
7. 1992・1993	自分の「親子の似より」の結果をみた学生達の感想・受け止め 方 (内省報告) — 100名以上—

1980論文の後半において、“現代における「青年と親」のとらえ方”というテーマで、1970年代の日本における親子の関係を識者の考えをもとにしながら自分なりにまとめた。その時取り上げた中から3人に的を絞り、その考えをどのような形で吸収し融合させてきたかをみてみよう。

- 1) 福島 (1977)：青年において子ども達の心的構造は完成されるが、このプロセスは両親との愛情の同一化と内面化による両親との結合が保たれている場合の方が円滑に行われる。青年期における「親の役割」は、幼児・児童期におけるような本能的・直観的なものではなく、知的で洞察的な対応をしなければならない。
- 2) 安香 (1977)：青年は理屈 (規範的な面) では親を否定したようなこといい、親から離れているように見えるが、情緒的 (情愛的な面) ではなお親に依存している向きがある。表面的には親の生活態度を否定しながらも、その生活には親密さを感じている。
- 3) 津留 (1977)：親子間には生涯ある情緒的なつながりがある方が本当であり、少なくともその方が人間的である。……社会というものは、それぞれの世代がその世代らしく生きつつ、なおその間に多様な調和があってこそ面白い。
- 4) 37歳当時の考え方 (1980)：両親は仲のよい夫婦であり、明るい家庭のムード作りを日々の生活の積み重ねの中で心掛けていく。その雰囲気の中で、母親は青年期のわが子に一人の人間として接し、子どもとの間に一定の距離をおき、お互いの間に一種の厳しさをもった慈愛に満ちたまなざしを感じあえるような関係の形成に努力する。一方、父親は「社会の窓」として自分の人生を生きてみせる。

51歳になった今、カウンセリング実践をしている時に、ある一人の青年の母親に話した助言のことばを想い浮かべている。それは前に紹介した「心の中のスカート」というキーワードである。このことばに込めた意味・イメージは、不安げに母親のスカートの裾をしっかりともっ

て離れようとしないうつな子の姿である。母親と幼な子の二人の関係を示しているこのほほえましい光景を、心の問題に置き変えてみると青年期の心内化プロセスがみえてくる。当然の事として青年と母親の関係は心の中においても変化を始めていなければならない。情緒的な問題をおこしている若者・わが子に対し、親は邪険に突き離すわけにはいかない。かといって幼児をあやすように扱うわけにもいかない。そこで「心の中のスカート」が登場する。母親と子どもの関係が以心伝心ならば、その心の中のスカートを通して親は不安な自分の気持ではなく喜びを、一人の人間としての自分の喜びをその日の実生活の中で体験し、その真心を伝えていくのである。思い切って生活のリズムを変え、外へ出て自分が楽しんでくるのである（もちろんわが子と一緒にの方がもっとよい）。その日々の努力が、心の中に幼な子を持ち続けているわが子に伝達していかないはずはない。そのうち心の幼な子は勇気を出して、その心の手を母のスカートの裾から離すだろう。最初は不安の方が多くても、そのくり返しのうちに喜びとなり自信となっていくに違いない。そう信じる方が、自分を責めるよりも気分は随分と楽になる（この時のカウンセリングは成功した）。

青年をもつ父親のことばとしては、「社会の窓」よりも河合（1992）の「（親の）壁」を借用したい。この両親の心に命名した二つのキーワードの今後の見通しをつける上には、津留（1977）の考え方がそのまま役立つと思う。それを次に記してみよう。「われわれの個人的生命は、親を通した長い連続線上にあり、また子をもうけ育てることで遠い未来への延長線上の原点にもなっている。この自覚によってわれわれは自分を時空から孤立した瞬間的な存在としてではなく、大きな生命の流れの中に定位できる（1980論文 p. 73 より）。」当時の心に響いたこの言葉は、今、「親と子が共に生きる」つまり『共生』というキーワードで説明することが可能なところまで辿り着いた。

研究方針と方向性

7 区分表示法による研究が追究しようとしている主題については1985論文で絞り込んでおいた。少し修正を加え、ここに抜き出してみよう。

- 1) 青年は一体自分をどのように理解しているのか。
- 2) 青年の自己認知を支えている両親像、つまり、自己の心の内に生きている父母の姿（心内化されたイメージ）とはどんなものなのか。
- 3) 自己イメージと心内化された父母イメージの関連性と個人差。

さらに1988論文ではもっと突っ込んでまとめている。

- 1) 女子学生の自己認知と両親のそれとを切り離して検討していかなければ、無用な混乱を招く恐れが大。あまりにも沢山のデータを目の前に据え、一括処理するやり方は、人智（といっても筆者の人智だが）を越える。——これは、4つの人格認知因子を3つの評定対象のすべてにおいて一度に見比べることができるということから発生した贅沢な悩みである。この点については、コンピュータが処理したクラスター分析結果でもやはりうまく読み取れない（1985論文）。——
- 2) 知覚心理学の「図と地」構造という視点を取り込みたい。「私」と「心内化された親」との似よりあるいはズレを、ある時は「私」を図にして考え、心内化されている親を地で受け止めてみる。別な時はその逆のことを試してみる。このようにして『自己』あるいは自己形成のプロセスをみていけば、この方面の研究にも新しい知見を提供できるかもしれない。

研究者としてのこだわりの一つに、「全体と個」という心構えがある。これは、平均的人間

像に迫りその法則性を探り出そうとする基礎的研究(実験・調査)と、一人一人の個性を大切にしその成長を期待する事例研究(臨床)の橋渡しをしたいと考える筆者の夢なのである。その接点となる場所にこの「親子の似より」研究を位置づけてみたい。自己意識の発達(自己形成)と親子の似より(あるいはズレ)を複線的に捉えながら追究していくという手法は、自分の研究テーマを「自己」と「親」に絞り込んだ次点ですすでに必要な事だったのではあるまいか。ただし、前述したようにあくまでも親子の関係は、心の内にイメージ化されている親を親と子の似よりまたはズレといった次元で観ることに留めておきたい。一人の人間の「自己」の中に組み込まれ心内化していく親子の似よりのプロセス、ついで、次の世代にそれはどのように引き継がれていくかという継承化のプロセスとして迫っていきたい。この方が、私の研究を拡散させずに済ませられる。

ここまで論を展開させてくると、これからの研究対象を女子青年から成人期の女性の方向にもっていった一連の調査の意味がはっきりと見えてくる。「一体化—(分離)→対峙—(歩み寄り)→融合—(一体化)……」。このような人生の伝達文脈の中にこの「親子の似より」研究は位置づけられるはずである。つまり、これが心内化プロセスであり、次世代への継承化プロセスなのだ。ここにおいて初めて Erikson の業績を私は私なりに引き継ぐことができるように思う。換言すれば、「親子の似より」という視点からその人のその人らしい人生とその人ならではの人生周期が垣間みえてくるということだ(Erikson 1950, 1977, 1980, Evans 1967)。

ラウンドテーブルでの成果

日本性格心理学会第3回大会のラウンドテーブルで、研究者の心理的道具概念としての『自己』について話題提供をしてみないか、という呼び掛けが自己・自我研究会(代表 杉山憲司氏)の方からあった。了承した後約半年かけて「親子の似よりの測定と自己受容の関係について」というテーマで構想を練り、発表のためのレジメの作成をしていった。この作業の手順が本論文となり、「親子の似より」研究の展望を大きく前進させることに結びついていった。その発表のレジメに手を加えながらまとめたものを4つ紹介してみよう。

- 1) Freud, S. の「同一視 identification」と Erikson, E. H. の「同一性 identity」は共に有名な心理学の概念であるが、この二つの概念を同一線上に置かず、少しずらしてみたらどうなるのだろうか。その間を取り持つものとして親子の「似より similarity」概念は役立つのではあるまいか。つまり、「内なる他者」としてのそれである。——この話を聞いていた杉山氏(東洋大)は、私のこの概念に「人間的安全の保険みたいなもの」という註釈を加えた。——
- 2) 多分「同一視」からスタートしていこうこの「親子の似より」という概念を、自己形成(自己意識の発達)と区別しながら並存的(平行的)にしばらくの間見続けていきたい。
- 3) 「人生周期 life cycle」という枠組みの中で、「同一視」の延長線上にセットしたこの「親子の似より」を、西平(1986)のいう「私」と「内なる他者」の后者の発達として読み取っていく。——「自己とはかかわりあいである」とする早坂(1967)の考え方がここで生かされることになる。——
- 4) このような複眼的な見方をすることは、新しい問題の発見に結びついていくのではないかという強い期待感がある。——沢山のデータを一度に合わせて観ていくというやり方は複雑になりすぎ、混乱をきたす危険性は大きい。だが、ただ「自己、自己、自己、……」という追究(のめり込み)を防止し、「自分とは一体何者なのか」「自分は何のために人間

としてこの世に生をうけたのか」という人間の二大テーマに廻り道ではあっても、ゆっくりと一歩一歩近づいていくことになるのではあるまいか。——いろいろな角度から一つの現象（ここでは「自己」現象）をじっくり見る（観る）ことは大事なことである。

1970年代を振り返って青年と親のことを論じたが（1980論文）、その時日本の青年が自立するための課題について2つのことに触れた。「母親の期待を克服し、母子一体の絆を切断する」「父親の人生そのものを通しての厳しい援助を受ける」がそれである。青年と両親のあるべき関係を一応このように設定しスタートさせた研究は、その後の成果によって2つのことが確証されている。

① 一般的にみると、女子青年は両親を肯定的に認知している。

② 親子の似よりをベースにして抽出された似より「大」群と「小」群の比較からは、一貫して自己の受け止め方にも両親に対する認知でもかなりの差をみせる。

親と子はそれぞれ育ってきた歴史と社会を異にしている。このお互いの時と場の違いを親子とも背負いながら、青年は親からあるものをそれぞれが受け継ぎ、青年はそれに何かを付け加えながら成長し、そしてそれを何らかの形に仕上げつつ次の世代に伝えていく。つまり、これがわれわれの「私」と「内なる他者」のかかわりの心内化と継承化の大切なプロセスであり、かつこの二つは同時に進行していく。ここにこそ「親子の似より」の発達の重要な意味が存在する。

Erikson の life cycle 理論の発達段階と発達課題でもって解説を試みれば、この研究のねらいはⅤからⅧ期にかけてのものであるといえようか（図3参照）。

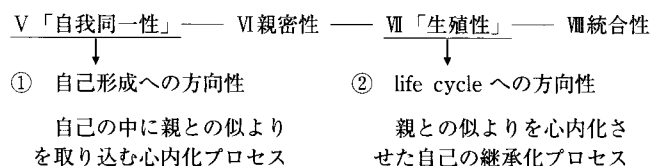


図3 Erikson 理論に位置づけた「親子の似より」研究

4つの人格認知因子と6つのサブカテゴリー

1986年9月に実施した幼児をもつ母親のデータを再度洗い直している時気付いたのであるが、1985論文で析出された4つの人格認知因子はF1 内向性とF3 誠実性でさらに2つずつのサブカテゴリーに分けられるのである。F1の内向性は「小心性」と「行動性（－）」、F3の誠実性は「持続性」と「愛他性」で構成されている。母親がみたわが子（幼児）の48コの性格特性項目について因子分析をした折5つの因子が析出された。この子どもの5つの性格因子を母親の4つの因子と見比べていた時に分かったことである。これからの研究においては4つの因子だけでなく、この6つのサブカテゴリーを用いて「親子の似より」をみていくこともできるだろう（またまた複雑化してしまったのではあるが。表2参照）。

これから20年間の研究道標（素案）

この一連の「親子の似より」という認知レベルでの研究に、20歳代の頃手掛けていた情動レ

「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ (秋山)

表2 4つの因子と6つのカテゴリー

因子名	カテゴリー名	性格特性項目
F1 内向性 (12 item)	S ₁₋₁ 「小心性」 (6 item)	しょげやすい 内気な 感傷的な おく病な 意志の弱い ロマンチックな
	S ₁₋₂ 「行動性(－)」 (5 item)	服従的な 他人を気にする スケールの大きな(－) 行動力のある(－) 指導力のある(－)
F2 自己顕示性 (9 item)	S ₂ 「自己顕示性」* (6 item)	支配欲の強い うぬぼれの強い わがままな 強がり 利己的な 頑固な
F3 誠実性 (14 item)	S ₃₋₁ 「持続性」 (6 item)	ねばり強い ひたむきな なげやりな(－) 几帳面な あきっぱい(－) ものを深く考える
	S ₃₋₂ 「愛他性」 (6 item)	親切な 正義感の強い 包容力のある やさしい 献身的な 無責任な(－)
F4 明朗性 (7 item)	S ₄ 「明朗性」* (5 item)	明るい さっぱりした 孤独な(－) 友人の多い ユーモアのある

※数を他の4つのサブカテゴリーに合わせた。

ベルの不安・恐れを消去メカニズム研究を絡ませ、それを行動レベルのテーマ (カウンセリング) にまで押し上げていくにはどうしたらよいのだろうか (秋山 1968, 1969, 1971, 1973, 1974a)。これまでの研究成果をどのように日常生活世界で活用させていくべきかについて一つの試案をここで論じてみたい。8年間のネズミの実験に加え、この23年にわたる気の長い調査の実施。その冗長さには心底飽いてきた。時には人格崩壊をきたすのではないかという恐ろしい目にもあった。この30年の研究生活の中で“人とのかわりあいが大切なのだ”ということを感じたし、数字の上に表わされた人の心を読みとることがいかに至難のわざであるかということもつくづく思い知らされてきた。これからの20年間私はどのように「私」とかかわり、「他者」とかかわっていくのであろうか。これを『自己形成』という形でどうまとめ上げているだろうか。今後の研究方法は調査法だけに頼るのではなく、箱庭療法を生かした基礎研究 (秋山 1982, 河合 1969, 岡田 1984)、学生相談室でのカウンセリング、卒論・修論指導で取り組みを始めた面接法をも取り込んでいければと思う。確かに調査は便利だし一度に沢山のデータが手に入る。しかし残念なことに協力してくれた人達の顔が全然みえてこないという欠点がある。これを補うためにまずは面接法を導入したいと考えているのである。また、カウンセリングの際には、「親子の似より」研究で得られた成果を大切にしつつも、そのことを直接前面には出さずにクライアントの話に耳を静かに傾けつつその位置づけを探っていきたい。

河合は、1992年にそれまでの自分の取り組み方や理論をまとめ一冊の本を出した。この「心理療法序説」に出会ったことで私の固いカウンセリングマインドは一挙にときほぐされた。“カウンセリングはクライアントを治すのではない。一緒に歩みつつ、二人の物語史をつくり上げていくプロセスなのだ”という彼独特の語りに安堵し、肩の力が抜けた。その頃から悩み事の相談に乗ることがあまり苦痛でなくなり、変に構えるということも少なくなってきた。まさに私は心の中で何者かに出会ったのである。河合の精神を内なる他者として取り込んだのかもしれない。この気持を一期一会の精神でお裾分けすればよいのだ。調査法・面接法・カウンセリングの三本柱に箱庭療法の遊び的要素を加えていけば、これからの研究生活は随分と楽に

なり楽しさも増していくだろう。

これから後の研究は次の4つを組み合わせたものになると思われる。

- 1) 並存的（平行的）追究——自己形成（自己意識の発達）と心内化されていく親との似よりまたはズレ——
- 2) 心内化と継承化のプロセスを人生と人生周期に絡ませながら把握していく。
- 3) 研究手法：調査法—面接法—カウンセリングの併用。
- 4) 認知—情動—動機という3つの心の機能を行動に結びつけながら人間を理解していく（図4参照）。

この1)～3)を相互の関連でみてみたのが図5である。

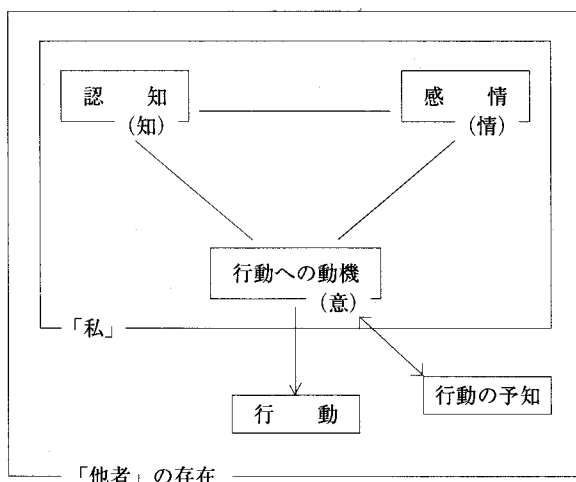


図4 人間理解の模式図

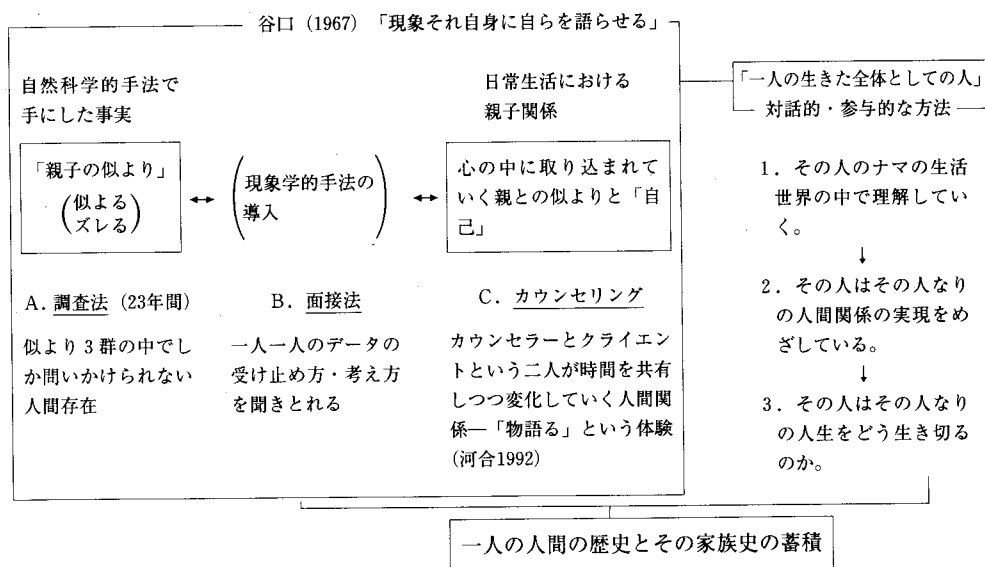


図5 「私」と「内なる他者」からみた「親子の似より」研究の素案

私の中の「内なる他者」について

私はいかにして「親子の似より」というキーワードに辿り着いたのだろうか。その経緯についてまとめ上げたのが図6なのだが、このように描き出してみた時心の中で大きく突き上げる何ものかがあった。この思いは意外と強いもので、20歳代から30歳代にかけて目通しをした1960～1970年代に出版された専門書をもう一度じっくりと精読させるように駆り立てた。この読み直しと抜き出し作業を始めていくなかで、30歳と50歳ではその読み方が随分と違ってきただけで驚きは既に述べた通りである。図6には人々との出会いと私の人生との絡み合いが記されている。30歳以後の思考を豊かにしてくれたのはこの人達であったのだ。ゼロからスタート

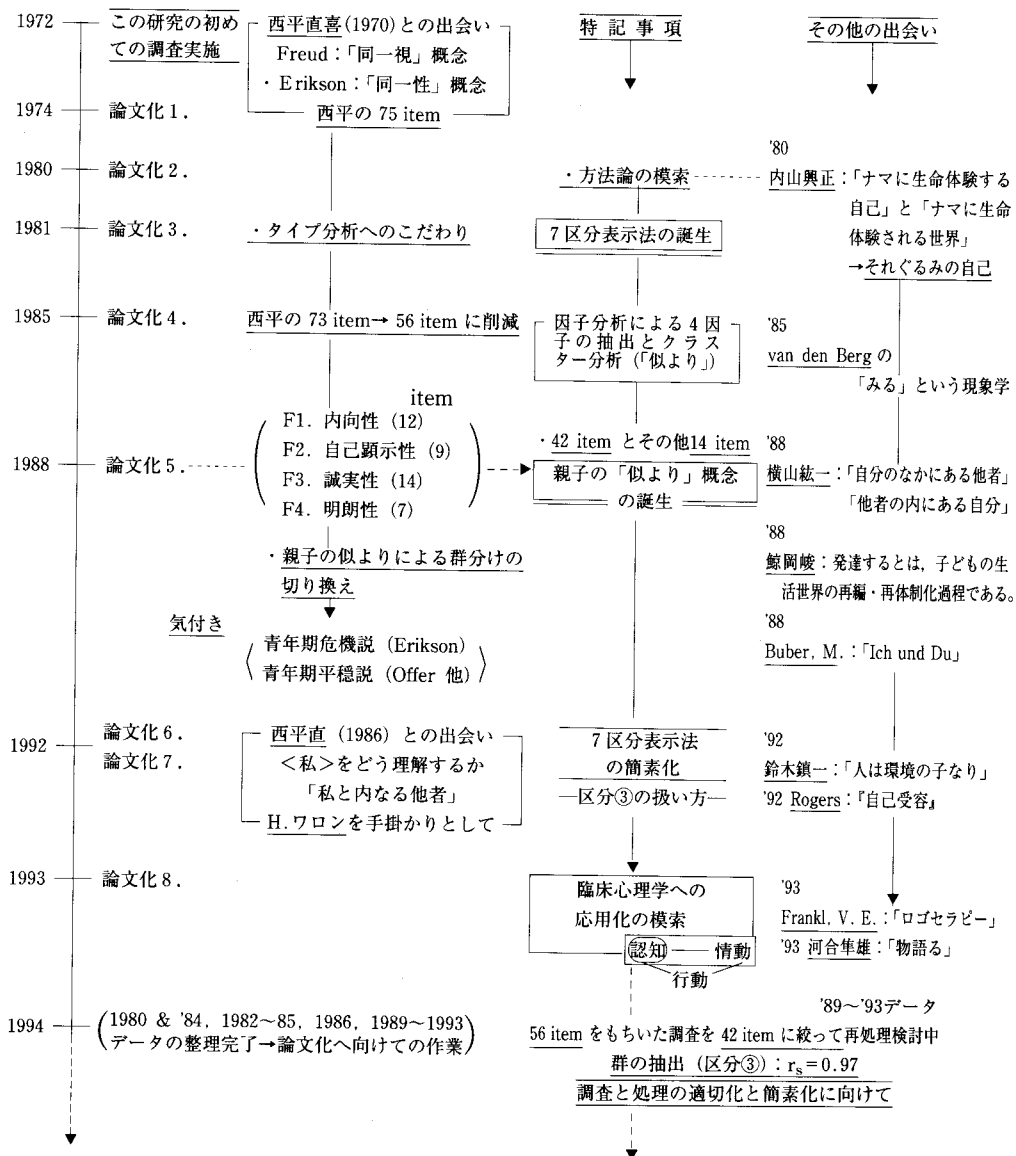


図6 なぜ「親子の似より」というキーワードに辿り着いたのか (その経緯について)

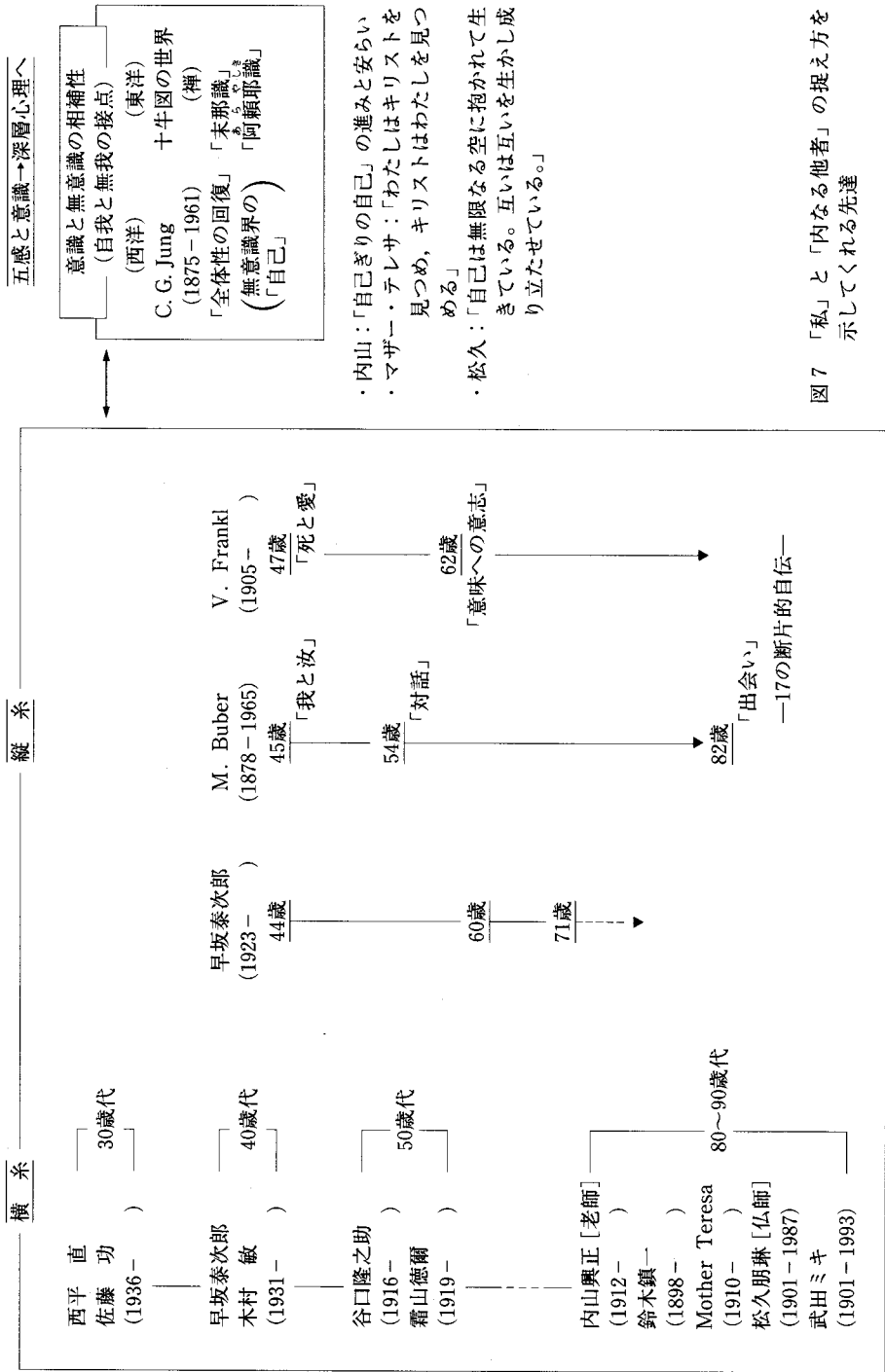


図7 「私」と「内なる他者」の捉え方を示してくれる先達

した私の2番目の研究はこうにしてライフワーク化したのである。

「この研究の原風景はどこにあったのだろうか」と自分に問いかけてみると、それは間違いなく小学校5・6年のクラスの中にあった。何と学級文庫の存在だったのである。当時読み耽ったのは偉人伝だった。この子ども体験が今ここでこのような形となって姿を現したようだ。「私とは一体何者なのか」の原風景は5・6歳の頃にあったということは1992b論文で紹介している。それは死のイメージを初めて抱いた時のこと、つまり朝鮮戦争（1950）へ向けての不穏な動きを感じとった頃のことだった。

これから先じっくり腰を落ち着けて取り組みたいものがある。この世で自分の人生をしっかりと生きてきた先人達の心の軌跡を辿りながら、彼らが「私」と「内なる他者」をどのように融合させ調えていったのか。これを観とっていききたいのである。その先達の自己形成を読み取りながら、「親子の似より」とか「親子のズレ」というものの心内化と継承化のプロセスを探っていききたいし、残されたこれからの人生の目標をも定めていきたい。「自分とは一体何者なのか」「人間はどう生きていくのか」の追究のために現時点で選び出している人々を図式的にまとめてみたのが図7である。これは自己形成のめざすべき方向性を探し出す試みであり、自己をみつめるためにどのような概念を彼らが創案していったかを学びとりたいからなのである。「私」を実体として捉えないで、かわわりとプロセスの中で理解してみるという発想の行くつき先を予見してみたい。しかし、これは今始まったばかりである。焦らずに粘り強く挑戦していこうと決心した。

「親子の似より」概念の深化に向けて

——できれば「似より」を視野に入れての胎動を——

「親子の似より」という概念はいまのところ操作的定義にしかすぎない。区分③（三者共通区分）の項目数で決定された3群に命名されたのがこの概念なのである。ラウンドテーブルにおいても指摘を受けたのだが、この概念の深化が求められている。「私」と「内なる他者」という自己把握において、親と子の似より（またはズレ）をどのように位置づけていくのか慎重な配慮がいりそうである。操作的定義から「似より」の新しい概念化へ向けての作業には、この親子の似よりだけでなくもう一つ高い次元への挑戦も射程距離におきたいものである。今考えていることを少しまとめて論じておきたい。

1. これからの「親子の似より」とか「親子のズレ」という概念は、自己と内なる他者とのかわりあい攻めていく。つまり、「私」を理解していくとき、それはどのような形で取り入れられ、融け合っていくのだろうか。
2. Erikson の概念である「自我同一性」とこの親子の似より（ズレ）は、どのようにすれば統合化されうるものなのだろうか。彼は発達段階Ⅰにおける課題を「基本的信頼感」、危機を「不信任」とした。そして、人生の最初の主要なかかわりの対象者を母親ないしは母親的な人とみる。この発達課題が生後1年位の間にうまく身につけられれば、その後の人々とのかわわり方にも信頼が汎化されていくと考えている。自己形成にとってこの課題は重要なことであり、その人の生きていくためのベースになるものといえる。彼の考え方と私の追究の仕方はそう遊離したものではないし、杉山氏も“人間的安全の保険のようなもの”と読み取っている。では、「親子の似より」はいつ頃まで「私」という存在を見守ってくれるのだろうか。もし、自己形成の途上でこの保険のようなものを捨てた人がいるとすれば、その人

はどのような形で自己を確立していくのだろうか。

3. 「親子の似より」は自己形成（自己意識の発達）にとって一つ高い次元にあるメタ認知的存在なのだろうか。それとも単に角度を変えて自分というものを見ているにすぎないのだろうか。
4. 自分の存在を「私」の次元と、「内なる他者」の次元から捉えてみると図8のようになるのではあるまいか。

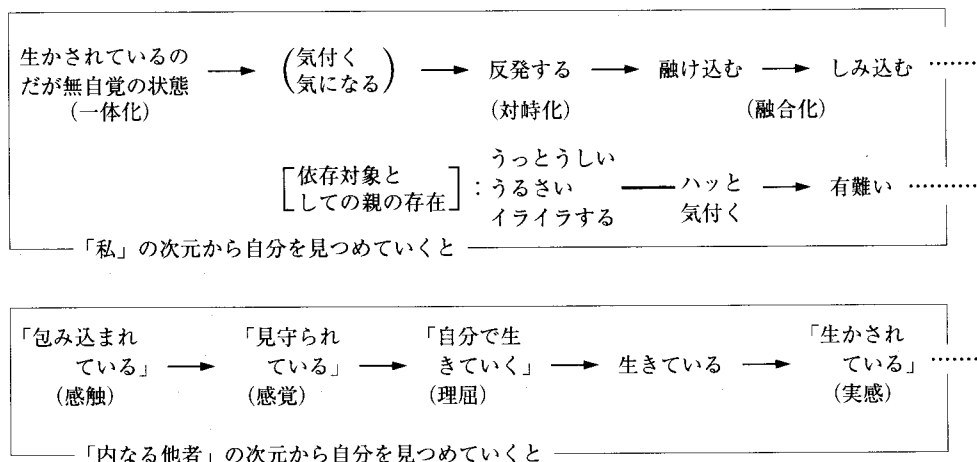


図8 「私」の次元と「内なる他者」の次元からみた自分の変化

5. 認知レベルにおいてこのような親に似よるとか親とズレるとかいった現象があるということは、どのように理解していくべきなのだろうか。今のところでは、①三者共が似ている②母子が似ている③父子で似ているということになろうか。②の状況にあっては父親との間に差があるか、または父親のことはよくわからないということが問題になる。③では母親との間の差とか母のことはよく分からないということになろう。
6. この認知の差に情動レベルの好悪の感情を絡ませると、自己形成（自己意識の発達）にとっては①②③で大きな差異を生み出していくことだろう。1984b 論文において、わが子（幼児）をみる両親の目は、はっきりときょうだいの出生順位の差からくる性格の違いを見取っていることを検証した。親は幼いわが子の中に自分との似よりとかズレをしっかりと読み取っている。これをズレるという面から捉え直していくと、自分とどちらかの親との間に隙間ができたということになろうか。①自分のみが浮いている（父母接近型）②自分が両親と対峙している（父母接近型）③母親のみが浮いている（父子接近型）④父親のみが浮いている（母子接近型）⑤三者がバラバラの個性をもつ（個性型）。これは、認知タイプで研究していた1980－1985年の攻め方と結びつけて考えたものであるが、このように論を進めていくうちに面白いことに気付いた。何と1985年までは「親子のズレ」の側面から自己を見ていたが、1986年からは「親子の似より」に切りかえてその追究を始め出したというように考えてみるのできるのである。これから自分というものを「私」と「内なる他者」とのかかわりとプロセスから探っていく場合、また、概念をさらに深化させていく時、この二つの概念の使い分けはかなり大切な課題を背負っていそうだ。このことを次のような2つにまとめ

ておいた。

- 1) 親子の「似より」は似よるという行為へとどう発展していくのか。
- 2) 親子の「ズレ」はどのようなズレるという意識を発生させていくものなのか。

人生と人生周期の絡みについて

霜山（1978）が出会いの中で取り上げている「まわりにたちこめた雰囲気」と「まなざし」という2つの概念は、この研究の文脈においても特に大切なものである。これをもとにしながら考察を進めていくうちに浮かび上がったのが次の図式であった（図9）。

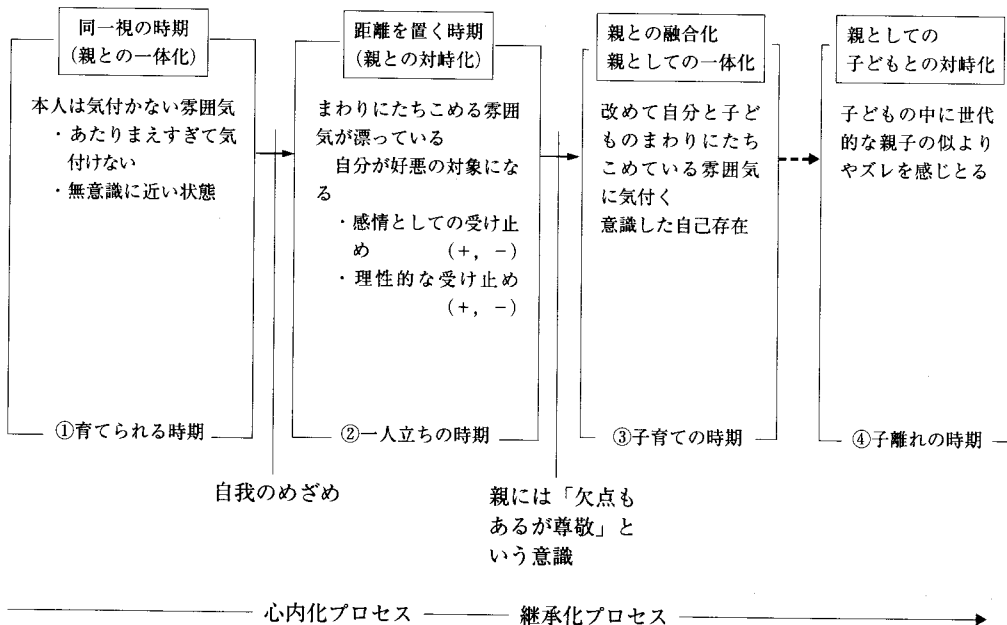


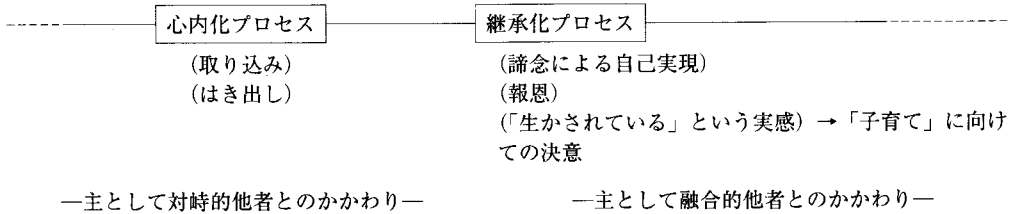
図9 心内化と継承化のプロセスの図式

このように見て（観て）いくと、親と似ていると受け止めている人は幸せなのだろうか、親とズレを感じている人ははたしてどうなのだろうかということが気になる。今、ここでそのような認識をしている人の生活世界とはどんな状況にあるのだろうか。情・意レベルでの心の安心はどのようになっているのだろうか。ここにも新しい対人関係・新しい自己形成を求めていく一般的な説得法と個別なそれへの分岐点が存在する。親に似る（どちらか片方であっても）、親と対峙する、孤独になるというように実にいろいろな人生への対処法がある。自他肯定を維持し続けたっていいのだし、自己否定・他者肯定のプロセスを経て自己受容に到る道歩んだってよい。一人一人の歩みや人生はもちろん違って面白いのだし、それがその人なりに変化していくから人生の旨みがあるのである。van den Berg (1982) が「見る」という自分の学問で感知した人間という存在は次の2点であった。

- 1) 人間の生というものは変化し続けるのだ。
- 2) 人間はひとりひとり違うのだ。

次の図10を眺めていると、自分の人生を生きていくということは、「私」の中に他者を受け入れることであり、「私」を他者として次世代に受け渡す人生プロセス (life cycle) と言い換え

(知のレベル)



(情のレベル)

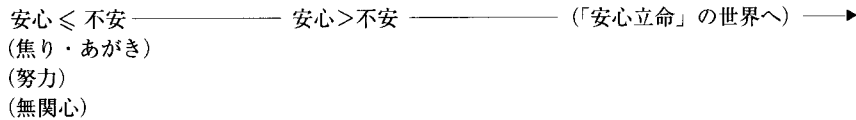


図10 知と情のレベルでみると

てもいいのではあるまいか。一人の人生をその人の人生周期という次元に絡ませるならば、われわれは「私」と「内なる他者」とのズレの度合を調整しつつ、関係として、プロセスとして絶えることなく自己形成し続けていくということになるのである。その際、人間的安全の保険のようなものである「親子の似より」を心の支えにして生きていくか、この万が一の保険を捨ててでも生きていきたいか。それを選びとるのは各人の自由である。しかし、それが将来において自分や自分を取り巻く人々を幸福にするか不幸にしまうのかは、青年期の時点にあってはそのことの結果を誰一人として知ることはできないのである。青年期をすでに通りすぎた大人達にとって出来ることはただ一つ、彼らのために仕掛けて待ち、そして祈ることだけである。

この研究はさらなるステップがもう準備されている。「親子の似より」を『似より』という概念にまで拡大し、さらに深めていこうとすれば次のようになるのではあるまいか。51歳の筆者が抱いている一つのイメージをここに示してみよう。これがこの論文の最後の締めとしての図11である。

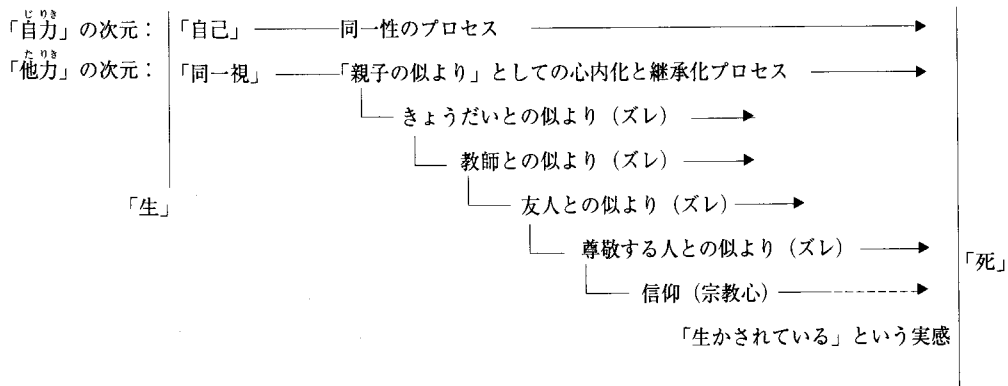


図11 「似より」の発展

お わ り に

本来ならばこの論文は、1982-1985年の第Ⅱ期調査に4年間連続して協力してくれた34名の学生が「親子の似より」をどのように推移させたかについてまとめ上げたかった。そのためのデータはすべて揃えてあった。しかしながら、どうしてもこのようなまとめを先にしたいという強い気持には勝てなかった。今回潔く諦めることは割と楽だったし、このような形で私の研究の現状とこれからのパースペクティブが仕上がったことには満足している。内容面での未熟さは隠しようがないけれど、28歳からスタートさせたこの研究が51歳の今、よくもここまで押し進められたものと我ながら感心している。何度投げ出そうと自棄になったろうか。その度に歯をくいしばり思い留まった。その自分の無器用さ、粘りに今となっては感謝している。1973・4年の頃、当時70歳初めの光岡 始画伯は次のように言われた。「みてごらん！空も川も山も鳥も木も草もみんな生きているのだよ。生きるって素晴らしいね。」30歳になったばかりの私の心はその時この言葉をしっかり受け止めていた。だからこそ20年後この論文として結実化したのである。

武田ミキ先生の満91歳を祝うという思いを込めた「武田ミキ人間教育論」は、1992年11月20日の誕生日に無事出版された。その第2章めざす人間像を分担執筆している時に我が手中に納めた「共育」と「共生」のことはもちいてこの論文の最後を締め括りたい。

わたしたちは「共育」という心の土壌の中で育てられながら、自分を自己受容し、他者をも他者受容することができるようになるまで日々努力していきたいものである。生命の流れに沿った生き方の中でわたしたちは「共生」という世界に身を委ねられるようにになりたい。その自分らしい一人の「自己」になるための努力を日々の生活の中で心内化させつつ継承化へと持っていきたい。わたしたちは確かに生かされている、森羅万象の大切な一部分として。われわれすべてを生かしているものに対してそれを神とか仏と呼ぶのであれば、この精神の世界にめざめた者を私は素直に認め尊敬したい。そして自分もそれを認めることのできる存在者になるべく変化していける個であり続けたいと強く願う。

文 献

- 秋山幹男 1968 行動療法の一つの道 異常行動(PBD) 研究会誌 7 85-90.
秋山幹男 1969 シロネズミにおける回避反応の消去と消去法の関連について 動物心理学年報 19 1-16.
秋山幹男 1971 回避学習におけるCRと拮抗反応の関係について——先行学習と移行学習の分析より—— 広島大学教育学部紀要第1部 20 197-209.
秋山幹男 1973 全体的な場よりみた条件性回避反応の消去と消去法の意義 異常行動研究会編 行動病理学シンポジウム 91-111 誠信書房
秋山幹男 1974a 消去期の推移からみた往復回避反応に対する消去法の有効性 異常行動(PBD) 研究会誌 14 12-21.
秋山幹男 1974b 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 Ⅷ 23-38.
秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について (2)——4年間の縦断的研究—— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74.
秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について(3)——タイプ分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 16 61-72.
秋山幹男 1982 一女子学生の連続箱庭作品をもちいた投影法的研究——同一年齢女子青年達の反応について—— 広島文教女子大学紀要 17 55-74.
秋山幹男 1984a 女子学生における自己と父母の認知について(5)——認知タイプ別にみた青年らしさと

- 自分自身の性格特性クラスター分析 日本心理学会第48回大会発表論文集 564.
- 秋山幹男・堂野佐俊 1984b 両親の幼児に対する養育態度と性格認知について(1)——きょうだい数・出生順位・性別構成による分析—— 広島文教女子大学紀要 19 39-83.
- 秋山幹男・有馬道久 1985 女子学生における自己と父母の認知について(4)——因子別得点をもちいたクラスター分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 20 57-68.
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について(5)——三者間の似よりにもとづく分析—— 広島文教女子大学紀要(人文・社会科学編) 23 83-102.
- 秋山幹男 1991 家族関係 今泉信人・南 博編 人生周期の中の青年心理学 108-122 北大路書房
- 秋山幹男 1992a 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88.
- 秋山幹男 1992b 親子の似よりと自己受容について——女子学生における理想自己と現実自己のズレ—— 広島文教教育(広島文教女子大学教育学会) 7 29-48.
- 秋山幹男 1992c めざす人間像 「武田ミキ人間教育論」 広島文教女子大学教育研究所 45-75.
- 秋山幹男 1993 教育相談について思うこと——「今、ここで」の大切さとは—— 教育相談センター年報(広島文教女子大学) 1 32-45.
- 秋山幹男 1994 親子の似よりの測定と自己受容の関係について(ラウンドテーブル2) 研究者の心理学的道具概念としての『自己』 日本性格心理学会第3回大会発表論文集 41.
- 安香 宏 1977 青年期における親への期待と失望 青年心理 1 金子書房 38-45.
- Buber, M. 植田重雄訳 1964 人間の復興 河出書房
- Buber, M. 児島 洋訳 1966 出会い——自伝的断片—— 理想社
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society* (2ed.) W. W. Norton & Company.
- Erikson, E. H. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会Ⅰ みすず書房
- Erikson, E. H. 仁科弥生訳 1980 幼児期と社会Ⅱ みすず書房
- Evans, R. I. 1967 *Dialogue with Erikson* New York; Harper & Row 岡堂哲雄・中園正身訳 1975 エリクソンとの対話(第2版) 金沢文庫
- 古澤頼雄 1973 人格形成の過程 現代青年心理学講座4「青年の性格形成」 金子書房 41, 83.
- 福島 章 1977 現代社会における親子関係 青年心理 1 金子書房 20-28.
- Frankl, V. E. 大沢 博訳 1979 意味への意志——ロゴセラピーの基礎と適用—— プレーン出版
- 藤井 虔 1983 青年期における自己認知の発達 京都府立大学学術報告「人文」 35 77-91.
- 早坂泰次郎 1967 人間存在と人間関係 谷口・早坂・佐藤 人間存在の心理学 川島書店 167-271.
- 早坂泰次郎 1986 現象学を学ぶ——患者の世界とナース—— 川島書店
- 早坂泰次郎(編著) 1994 <関係性>の人間学 川島書店
- Jersild, A. T. 1957 *The Psychology of Adolescence* New York; Macmillan Company (東京都私立短期大学協会編 1972 青年心理学 酒井書店・育英堂 p. 48 より)
- 木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 木村 敏 1973 異常の構造 講談社
- 木村 敏 1981 自己・あいだ・時間——現象学的精神病理学—— 弘文堂
- 木村 敏 1982 時間と自己 中央公論社
- 河合隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄 1978 ユングの生涯 第三文明社
- 河合隼雄 1980 家族関係を考える 講談社
- 河合隼雄 1992a こころの処方箋 新潮社
- 河合隼雄 1992b 心理療法序説 岩波書店
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教心研 31 292-302.
- 鯨岡 峻 1986a 心理の現象学 第4章<発達する>ということ 世界書院 177-255.
- 鯨岡 峻 1986b 母子関係と間主観性 心理学評論 29 506-529.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学(第3版) 東京大学出版会
- 亀口憲治 1992 家族システムの心理学 北大路書房
- 櫛谷宗則編 1993 禅からのアドバイス——内山興正老師の言葉—— 大法輪閣
- 三木善彦 1976 内観療法入門 創元社
- Mother Teresa・Brother Roger 植松功訳 1994 祈り——信頼の源へ—— 中央出版社
- 松久朋琳 1985 一心一仏 講談社
- 松久朋琳 1987 御手の上にて 日本教文社
- 光岡一芽 1982 句集 春夏秋冬——さいかち叢書第62集—— さいかち俳句会

「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ (秋山)

- 光岡 始 1984 画集 供華 ひろみ印刷
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀 洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)——Self differential の作製—— 東京教育大学教育学部紀要 13 59-83.
- 中山康子 1972 子どもの親に対する見方の変化の発達の研究 井上健治他(編) 青年心理学 有斐閣
- 西平直喜 1970 新しい存在と価値の発見 津留 宏編 青年心理学 有斐閣 133-180.
- 西平直喜 1983 青年心理学方法論 有斐閣
- 西平 直 1986 <私>をどう理解するか——H. ワロンの<内なる他者>を手掛かりに—— 東京大学教育学部紀要 26 197-205.
- 中村昭之・板津裕己 1988 自己受容性の研究——文献的研究と文献目録—— 駒沢社会学研究 20 131-171.
- 長尾三郎 1990 日本人の魂を彫る——「夢の国」をもとめた松久朋琳・宗琳の心の遍歴—— 講談社
- 荻野恒一・相場 均(監修) 1979 現代精神病理学のエッセンス ペリカン社
- 大野 久 1991 人格研究の動向と課題 教育心理学年報 31 68-76.
- 岡堂哲雄 1983 家族への心理的援助 日本家族心理学研究会(編) 家族臨床心理の展望 家族心理学年報1 金子書房 19-43.
- 岡堂哲雄 1986 あたたかい家族 講談社
- 岡堂哲雄 1991 家族心理学講義 金子書房
- 岡田康伸 1984 箱庭療法の基礎 誠信書房
- 鈴木鎮一 1966 愛に生きる 講談社
- 佐藤 功 1967 人間存在と知覚体験 谷口・早坂・佐藤 人間存在の心理学 川島書店 57-166.
- 霜山徳爾 1978 人間の詩と真実 中央公論社
- 谷口隆之助 1967 人間存在へのアプローチ 谷口・早坂・佐藤 人間存在の心理学 川島書店 1-56.
- 田畑 治 1977 親子関係の病理——過保護青年・甘え・物分りのよすぎる親—— 青年心理 1 金子書房 96-103.
- 津留 宏 1977 青年にとって「親」とは何か 青年心理 1 金子書房 6-19.
- 鐘幹八郎・山本 力・宮下一博(共編) 1984 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版
- 高石恭子 1988 青年期の自我発達と自我体験について 京都大学教育学部紀要 34 210-220.
- 内山興正 1969 進みと安らい——自己の世界—— 柏樹社
- 内山興正 1990 御いのち抄 柏樹社
- van den Berg・早坂泰次郎 1982 現象学への招待 ——<見ること>をめぐる断章—— 川島書店
- van den Berg, J. H. 立教大学早坂研究室訳 1988 現象学の発見 ——歴史的現象学からの展望—— 勁草書房
- 横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社
- 八木秀夫 1987 青年期に対する二つの見解 人文論集(神戸商科大学学術研究会) 23 79-96.
- 八木秀夫 1988 Identity-Status 研究の方法——Marcia の理論の検討—— 人文論集 23 281-296.

—平成6年10月31日 受理—